



稲垣 昭名誉教授

稲垣 昭名誉教授 年譜・著作目録

〈年 譜〉

- 1969年3月 愛知大学文学部文学科仏文学専攻卒業
1975年3月 南山大学大学院文学研究科仏語学仏文学専攻修士課程修了
1976年4月 名城大学兼任講師（フランス語）（至る1988年3月）
1977年4月 日本福祉大学兼任講師（フランス語）（至る1988年3月）
1979年10月 愛知大学兼任講師（フランス語）（至る1988年3月）
1988年4月 名古屋外国語大学外国語学部フランス語学科専任講師（至る1992年3月）
1992年4月 名古屋外国語大学外国語学部フランス語学科助教授（至る2005年3月）
1999年10月 名古屋外国語大学派遣研究員（ニース大学地域語聴講及び語学講座登録）（至る2000年3月）
2005年4月 名古屋外国語大学外国語学部フランス語学科教授（至る2011年3月）
2011年4月 名古屋外国語大学名誉教授

◇所属学会及び活動

- 1974年4月 日本フランス語フランス文学会中部支部学会会員
1979年6月 日本フランス語フランス文学会会員（現在に至る）
1989年 日本フランス語フランス文学会語学教育委員会委員（至る1992年）
1993年 日本フランス語フランス文学会中部支部実行委員会委員（至る1994年）
1998年 日本フランス語フランス文学会本部幹事（至る1999年）
2001年9月 日本フランス語フランス文学会語学教育委員会委員（至る2003年）
2003年 日本フランス語フランス文学会中部支部幹事（至る2004年）

〈著作目録〉

◇著書

- 『フランス語文法史における冠詞理論の変遷とその形成』（単著） 三恵社 2004年
『フランス語の初歩』（共著） 大学書林 1987年
『ことばを考える』（共著） 愛知大学言語学談話会 1987年
『ラ・クレ（フランス語文法の要）』（共著） 大学書林 1994年
『ことばを考える（3）』（共著） 駿河台出版社 1996年

◇論文

- ・「外国語学習における一つの考え方—その基礎的段階において—」(単) 愛知大学フランス文学会 *pleupleu* 第Ⅳ号 1982年
- ・「Gustave Guillaumeの冠詞論—序 *Nom en puissance* と *nom en effet* について—」(単) 愛知大学外国語研究室報 第6号 1982年
- ・「Gustave Guillaumeの冠詞論考」(単) 名城商学(名城大学商学会) 第32巻別冊 1983年
- ・「Gustave Guillaumeと宮下眞治の冠詞論」(単) 愛知大学外国語研究室報 第8号 1984年
- ・「フランスの地域言語—ブルトン語について—」(単) 中西学園研究紀要 第2号 1987年
- ・「16世紀フランス語における冠詞論について」(単) 名古屋外国語大学外国語学部紀要 第17号 1998年
- ・「17世紀フランス語文法における冠詞論(1)—Charles Maupasの理論について—」(単) 名古屋外国語大学外国語学部紀要 第19号 1999年
- ・「17世紀フランス語文法における冠詞論(2)—Antoine Oudin, Laurent Chiflet, Claude Irsonについて—」(単) 名古屋外国語大学外国語学部紀要 第20号 2000年
- ・「フランスにおける地域語の現状—ニース語について—」(単) 名古屋外国語大学外国語学部紀要 第21号 2001年
- ・「ポール・ロワイヤル文法における冠詞論」(単) 名古屋外国語大学外国語学部紀要 第22号 2001年
- ・「Nicolas Beauzéeの文法における《Article indicatif》、あるいは冠詞論」(単) 名古屋外国語大学外国語学部紀要 第24号 2002年

◇口頭発表

- ・「フランス語の動詞時制について」(単) 日本フランス語フランス文学会中部支部 1974年
- ・「文法の成立—フランス16世紀を中心にして—」(単) 愛知大学公開講座言語学談話会 1985年
- ・「文法の成立から誕生へ—フランス16世紀から17世紀への歩み—」(単) 愛知大学公開講座言語学談話会 1986年
- ・「ルソーの言語起源論」(単) 愛知大学公開講座言語学談話会 1987年
- ・「フランス語の普遍性について」(単) 愛知大学公開講座言語学談話会 1988年
- ・「間投詞とは何か」(単) 愛知大学公開講座言語学談話会 1989年
- ・「フランス語における飲食を意味する動詞について」(単) 愛知大学公開講座言語学談話会 1990年
- ・「品詞分類において間投詞が意味するもの—フランスにおける品詞分類小史—」(単) 愛知大学公開講座言語学談話会 1991年
- ・「フランス語の *Copule* (連結詞) 《être》について」(単) 愛知大学公開講座言語学談話会 1992年
- ・「言語表現の一形式としての受動態について—フランス語を中心にして—」(単)

愛知大学公開講座言語学談話会 1993年

- ・「フランス語における付加形容詞の位置について」(単) 愛知大学公開講座言語学談話会 1994年
- ・「フランス語初期文法における冠詞論について」(単) 愛知大学公開講座言語学談話会 1998年

◇研究ノート

「問投詞とは何か―分類基準の問題―」(単) 名古屋外国語大学紀要 第2号 1990年

◇項目執筆

『小学館ロベール仏和大辞典』 小学館 1988年

献 辞

稲垣昭教授は1988年（昭和63年）4月に本学に着任されました。開学の年です。そして、2011年3月末に定年により本学を去られました。当然名誉教授の称号を授与されました。先生の着任の年に生まれた子供たちが今年学士号をもらって卒業していった事に気づきました。そこはかとなく、一時代の区切りを感じます。

私は、以下で先生の人柄と業績（研究と教育）に付いて率直に述べるのですが、どうしてもこれからの名外大や日本の大学についても暗示的に期待と希望を述べてしまう事になりそうです。

先生は、何はさておき、学生思いで彼等に真摯に接し、かつ親切な指導を心がけられました。否、人生のご苦労から来る、惻隱の情が働いていたように見えます。研修地で、花粉症に悩む学生には薬を買って提供する。不安を抱えて研究室にやってくるひとには時間をかけて対応する。卒業年限（8年）ギリギリにおい込まれた学生が、無事卒業していったのを私は見えています。「稲垣クリニック」は立派に機能していたと言えます。一体何を話していたのか聞きますと、「相手の言う事を聞いていただけ」が答えでした。これぞ、カウンセリングの至言だと素人ですが思います。

研究面では、『フランス語冠詞論の系譜』が、高く評価されましょう。ギリシャ語、ラテン語の文法家を手本にして自己を確立するしかなかった16世紀以降のフランスの学者達の貴重な文献を入手され、ほとんどわれわれには知られていない業績を、淡々と整理され20世紀にまでその特徴を記述されました。

上記の本を読むと、「ギリシャ語には冠詞はあったが、ラテン語にはなかった」ため、冠詞論は多くのひとを悩まし、言語史の中核を担う問題になるという問題意識を若くしてもたれたことがわかります。しかもそれが控えめで抑制のきいた文体で論じられています。冠詞は名詞の「格」を決

めるのか、「性」の標識なのか、それとも、また名詞の意味の制限や限定に関わるのか？ 20世紀まで、人びとの考えはそれほどに変化していないことがわかります。人文社会の研究に携わる者は改めて謙虚さが大切だと気付きます。

先生は、また言語の空間的な変化にも関心をお持ちです。ロマンス語のイタリア語、スペイン語も当然考察対象であり、ニース語の現在についての報告も業績に入ります。フランス国内にも、アルザス、ブルターニュ、バスク、プロヴァンスの諸語があります。フランスの南北の差は、幾多の戦いをへて統一されたとは言え、アクセントにはっきり痕跡が残っています。南仏を特に愛された先生の原点はどこにあるのか、聞き忘れました、、、。どこかのんびりした風土、明るい太陽、生きる喜び、ことばのおもしろさなどにそれはあるのではと自分なりに想像します。

最後にどうしてももう一言付け加えずにはこの拙文は終えられない気がします。それは、人間の性を見据え、ご自分の苦労を昇華して控えめにしか感情を外に出されないことから生み出されるものでしょう。即ち、独特のユーモアです。低級な駄洒落ではありません。深い意味で、フランス文化を吸収、昇華されて醸し出されているようにも思えます。もう先生とのやり取りの機会が失われるのかと思うと、寂しい気がします。卒業パーティの後、学生に「まだいるんですか」と言われとき、今の子は言葉使いを知らん！とにっこりと話してくれました。これなどは先生のユーモアの片鱗でしかありません。

2011年3月31日

フランス語学科長

熊澤 一衛